

骨行所

12

定価 一〇〇円

昭和三十三年八月十日 発行 第十二号

依田義賢
詩集

ろーま

¥ 300

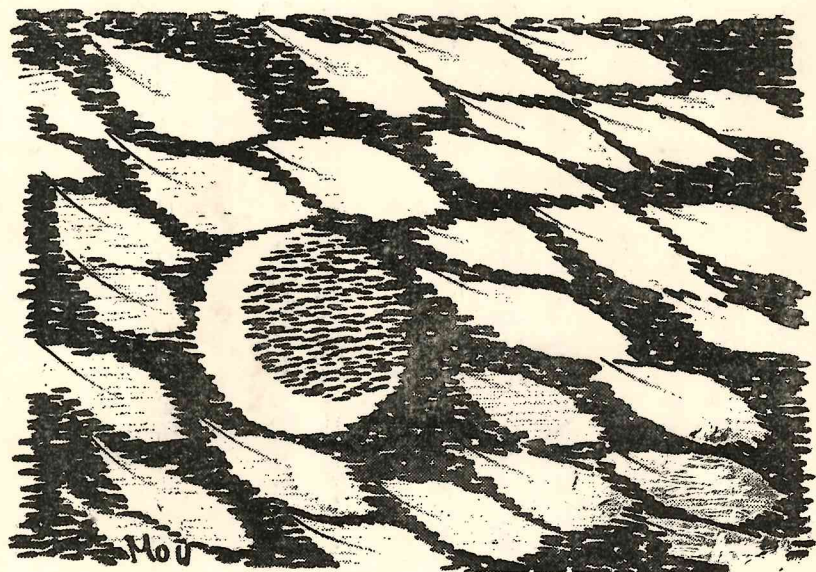
ベニス映画祭への旅に
ジェット機で捕へた雄大な詩精神

発行所

京都市左京区下鴨泉川町五三 依田方
骨 発 行 所

骨

No. 12



1957.7

西山英造 依田義賢
 依田義賢 榎梅忠夫
 依田義賢 榎梅忠夫
 依田義賢 榎梅忠夫

骨		12		目次	
睡眠中のファンタジー	習作 他一篇	ふかせ・もとひろ	富岡益五郎	4	2
△ろーま△感想		諸家		6	
むかでながや (1)		山前實治		14	
な形町附い		ジョーン・ブドニ ふかせ・もとひろ		15	
人形町附		荒木利彦		18	
不葱の歌		依田義賢		19	
玉葱の歌		佐々木邦彦		20	
綴南雑記 (5)		井上多喜三郎		21	
ある旅の日記		深瀬基寛		24	
某日日記 III		山前實治		25	
にがい人生		安藤真澄		26	
宿「骨」入帳		富岡益五郎		27	
新雪 他一篇		荒木利彦		28	
編手集 紙記		井上多喜三郎		30	
		佐野猛夫		32	
		井上多喜三郎		32	
		佐々木邦彦			
		野夫			
		猛彦			

表紙・挿画
 カット

ろーま

依田義賢詩集

* 溝口健二

これは三週間前(事實は四月五日頃であるが、詩集を起されてからである)に貰った依田義賢君の詩集を読んだ。感激した。

就中インドのデリーでかの詩が大好きだ。小生老来人間が、角が立ち、散文的なのがいやになつた。ロンバルディアの吟遊詩人の如く長閑でありたい。
(絶筆)

* 天野忠

長いこと入念に手がけただけに立派な仕事になつた。『骨』で見たときよりゲンと見えがする。堂々たる中年智者の正常歩というべきか。僕は『後記』の書かれた態度にも感心した。

* 武田豊

* 飯野一

溝口氏御生前に間に会つたかどうか案じられます。美しいステインドグラス風の表紙、御母堂様の筆になつたら一まの文字など、感慨の深いものがあります。一日にして羽田からローマに飛来したジェット旅客機の速さにも驚きますが、その短かい時間の中で、目に解れた印象を詩文に物された非凡さにも敬服の他ありません。「ローマの匂い」はパリには無い点も共鳴いたすものです。病弱でデリケートな貴兄が、南欧の太陽とその民族性にデモニーッシュ(動物的)なものを、感ぜられた事は私は大へん心惹かれるものがあり、彼のゲーテの伊太利亜紀行(イタリニツセライゼ)にも比すべき心境の一飛躍が兄に齎されたなら、詩集以上の大収穫だと思えます。

* 阿木翁助

思えば『冬晴』以来十五年も立ちま

とても立派な本です。あなたのお作品のように、幻想的な美しさです。じつと目をつむつた裏がわに『ろーま』が浮んで来るようです。

* 安藤真澄

日本の群小詩集を押し、ロマンの香も高く美しい立派な詩集と思います。真実な仕事への第一歩として、貴君のために祝福します。

* 田中克己

ろーまいただきました。きれいに出来上りましたので、宜しうございました。ただ母上の字と佐々木君のモザイクとが、カヴァーだけです。カヴァーがとれてしまつたら、どうなるのか心配しています。扉にも字をお使いになつたらよろしかつたと思います。

* 都村健

夜更けまで静かに拝読させて頂き、久しぶりに清々しい若さをとりもどし

ました。何かゴミゴミした、またわずらわしいことの多い映画の世界、殊にその代表的なような仕事に終日つきまといものがございません。

* 杉本長夫

先づ立派な装幀に目を見張つた次第です。夜の更けるのも忘れて憑かれたように読ませて頂きました。一寸例のない重厚な表現に心うたれ、次々とイメージを追求される手法に、なにか精神的な力を感じました。御作中「ジェット旅客機について」「ローマの匂い」が特に印象的でした。B・O・A・Cのコメットに乗られてローマに飛び、この様な豪華な詩集をつくられた貴兄が真に羨ましいかぎりです。

* 吉井勇

羅馬を御覧になりたるだけにてもうらやましく存じ候。

すね。かわらない御精進に敬意を表します。

* 児玉実用

題字大変結構、装幀また仲々よろしく、表紙甚だおちつきと「いき」さのある気品を感じ、中味の用紙と共に、至れり尽せりて立派なものです。感にうたれ、また羨しく思いました。

御作十六篇、何れも佳作で、その多くはかねがね『骨』で拝見、感銘を深くしていたのですが、もう一度こうして拝読すると、またまとまって全体として迫ってくる「詩」の力を強く感じました。そして短歌が単に生活の記録にとどまるべきでないように、(失礼ながら、こう言った詩集はえてしてヨーロッパ印象記になり易いのですが)詩も亦印象記以上のものであるべきは論を持ちません。ところが御高著にあっては、一作一作が単なる印象をはるかに凌いだすぐれた芸術品で、而も貴兄独特の鋭く新しい眼と心とで、現代

* 末次撰子

すばらしいご本をほんとうにありがとうございました。多様な、熱っぽい、そして重厚な歴史の積みかさねられた国へ、目をみはり深く息を吸って、体じゆうで惹き入れられてゆくのでした。色や匂いが溢れていて、しみ

じみ人間くさくって、播すぶられ、た
くさんのことをおもいました。
お母さまの題字、どんなにおよろこ
びかしらと思うと涙がこぼれそ
うです。

* 伊馬 春部

『ろーま』拜読感動しました。第一
章からまづその律動感に圧倒されまし
た。上昇までのリズム感——これはま
たラジオでの朗読でもすばらしいだろ
うと思いました。『ろーま』の題字御
母堂の手筆と承り、これまたことのほ
か感動いたしました。カバーだけでな
く「とびら」にも同じものがほしかっ
たですね。御孝心のほどがゆかしく思
はれます。

* 舟橋 和郎

私などは外国といえは満洲へ行つた
だけで、ヨーロッパのことなどは、本
で読んだ以外に知識はありませんが、
この『ろーま』を読むと、不思議なこ

とに、昔、行ったことがあるような気
がして来ます。髣髴と想い出が、臉に
浮かんで来るように感じます。詩の力
でしょう。

* 三浦 信夫

いそがしくても、詩はつづけて下さ
い。インド人の足など何回もよみまし
た。

* 清水千代太

とりどりに懐かしく興深く感動しま
したが、ジェット機にとりわけ大兄の
詩魂のユニークさを感じ、またトリー
トンの像にひとしお興趣の飛躍するの
を覚えました。そしてろーまを読んで
溝口さんの死にあらためて暗然としま
した。

* 安藤 鶴夫

みんな立派なものです。それに絵筆
でかかれたと思われるお母アさまの題
字まことに嬉しく拝見しました。

* 岩崎 昶

いままで知らなかった——小生だけ
かも知れませんが——大兄の一面にじか
にふれることができました。小生もい
つか外国を旅行したら、詩で紀行を書
こうかな、などと身の程しらの野望を
おこしました。そういう模倣慾をそそ
る威力を持つている詩集を、お祝い申
します。

* 八木保太郎

詩の判らない小生は、活字の後に君
の名画でもスカシで入ってないかとス
カシてみえています。

* 棚田 五郎

『ろーま』の風物は絵画や写真(映
画)でしか接したことはないのです
が、そうした樹の一角や寺院の中で、感
慨にふけておられるお姿が思い浮べ
られ、小生もまた時間と空間の混乱し
た妙な感慨にとらわれました。中学生の

頃、鵜外漁史の『即興詩人』の名文を
暗誦したりしましたが、いまでも覚え
ている冒頭の(羅馬にゆきしことある
人はピアツア、バルベリーニを知りた
るべし)の広場のトリートンの像が出
て来た時は、「ああ、またあの像はあ
そこにあつたのか」と安心(?)を覚
えました。装幀のステンド・グラスも
美しく、まことに羅馬へいらした記念
にふさわしい詩集でした。

* 港野 喜代子

私もよくろーま辺りをさまようゆめ
を今も見つづけますが、とてもとても
いつの日かです。依田さんのこの一書
を大切にいたします。

* 岡本 潤

詩集は諸方からたくさん寄贈される
ので、つい読みきれずに、心ならずも
積みあげたままなることが多いのです
が、あなたの詩集は何をおいても早速
拝読しました。そして、このごろの多

くの詩集でやや中毒気味だったのが、
ここでは眼を洗われたような感動をう
けたことを率直に申し上げたいと存じ
ます。私流にいわせてもらえば、あな
たの汚れないナイーヴな眼を強く感じ
ました。その眼で見られた異邦の風物
や古代の彫像や建築、それに対する日
本の芸術家の素朴(私はこの素朴とい
うことを何よりだいじなものと思うの
です)な胸のとどろきが、そのまま内
的リズムとなつて鮮烈にひびきます。

* 水木 洋子

私は詩が大好きです。

とくに「インド人の足」「カタコン
ベ」「ニケの像」「ステンドグラスの
堂」「ローマの夏の夕ぐれに」などに、
まごうかたなき現代詩人の魂のうずき
を強く感じて、深い共感をおぼえずに
はいられません。ほんとうによい詩集
を送って下さったことを感謝します。

* 藤森 成吉

近日中国への招待旅行で飛行します
ため、身につまされる思いでした。

* 竹中 郁

『ろーま』はすこし饒舌の感あり。
そのためか立休不足の様子。表紙カバ
ーの色もわるくてざんねん。

* 高橋 新吉

『骨』で貴君の詩に注目させられた
のは、ろーままで飛んで来られた経験

が物を言っているからだと思っ
ていました。

* 小高根二郎

ステンドグラスの堂が一番好きで
した。今迄の貴詩への一転機にこのろ
まはなっていると感じます。

* 西脇順三郎

『ろーま』という詩的旅行記は面白
いと思います。そういつた詩集を頂く
のは気持ちよく思います。

* 菱山修三

一読いたし小生も「ろーま」へ飛翔
した感じがずしりと来ます。いつかそ
ういう機会に恵まれることがありま
したら、大兄の仕事の範として小生もこ
ういう仕事を残したいと必々思いま
す。

* 深尾須磨子

曾遊ローマを思い返しながら、あな

たの映像のローマを大へん面白く巡歴
させて頂きました。空の旅を書いた詩
も大そう珍らしく、目まぐるしい動き
の中からこれだけの印象を詩にまで造
型されたこと。「インド人の足」「ア
ラビアの砂漠とペルシヤ湾の海と」に
は格別の感激をおぼえました。

* 矢野峰人

早速後記を拝見致しましたが飛行機
上の御感想もさる事ながら、欧羅巴の
入口としてのローマに立たれた時の御
感想と至極同感です。西洋には文明に
も文芸にも日本に見られない根づよ
い、色量感と生命感とを与える実には強
力不届なものがあるようです。御作は
まだ精読致しませんが、小生はこの散
文詩の詩集に多大の期待を寄せている
もので、御作はその道に掲げられた一
つの大きな灯と言えましょう。

* 城左門

なるほどかう云う風物詩の方法があ

るのだなと大変興味深く感じました。

* 扇谷義男

しみじみとしたなつかしいものを呼
びおこさせて頂きました。私は、ほん
とくに、自分にのりうつつてくる動い
ている影を感じました。

* 笹沢美明

常々こうしたディレクタンティズム
は小生の好むところのもの、読む側も
安心してよめます。「ローマの匂い」
特に力作であり、また興味深く拝読しま
した。

* 安西冬衛

ステンドグラスを瀟々たる帝国の
日の光のように、沢うるわしいレトリ
ックを幾度もいくども味読いたしまし
た。就中、「ミロのヴィナス二題」の
姿勢の秀抜さに感動いたしました。

* 野上素一

美麗な詩集ありがとう存じます。こ
とにローマを第二の故郷と考えている
私は、大変なつかしい気持ちでよみまし
た。バルベリーニの広場、ピンチヨの
丘、サンピエトロなどと、重要な主題
が並んでいるのは壯観です。

ロッパ紀行であるとともに、単なる紀
行文でなく、立派な詩的散文としての
結晶度をもつています。

この一巻には不思議に作者の熱い血
潮が流れていることを強く感じまし
た。「ローマの匂い」は相当長いもの
でありながら、ぐんぐんわたしをとら
えてはなさないだけの力をもつていま
す。骨のお寺を書いた「冒読のこれに
過ぎたるはない」に現われた、作者の
硬質な、それこそその骨とじかにふれ
たもののみが表現できる独特な文体に
も感動いたしました。これは一人の日本
詩人がヨーロッパの風物にふれて、自
分の内部をいっそう硬質に固めたよう
な印象をうけました。

さて一寸気がついたことですが、八
月十五日のフェラ・ゴスタはカトリッ
クの方では、クリスマスと復活祭につ
づく大切な大祭であるのに、今まで取
あげた人がいないのに、依田さんが取
上げられたのは面白いと思いました。
ただし些細なことですが、日本のカト
リックの訳語ではあの日が聖母マリア
の被昇天祭となっております。昇天祭とい
うのはキリストの昇天にだけ用いてい
ますが、それは五月二十七日です。

* 壺井繁治

先日來、風邪でねたきり読書もでき
ずにいまして、今日ようやく床をは
なれ、御作全部拜見して、少なからぬ
感銘をうけました。これは詩人のヨー

たいへん綺麗な装幀に先づ魅せられ
ました。印刷活字の大きさ、組方、寸分
の隙なく御見事な出来栄と存じます。

御作品シエット旅客機について以下
十五篇。何れも澁刺としてフレッシユ、

その風物がその儘目に映じて来るよう
です。これはすばらしいことです。こ
れまで外国の旅行記をよみましたこと
もありませんが、御作品から受けるよう
な強い感じはありませんでした。
アラビアの砂漠とペルシヤ湾の海
と、など怖しいようです。ローマの匂
い、これは迫り来るものがあります。
ステンドグラスの堂、極めて印象的で
す。

詩集『ろーま』の装幀は、この詩か
ら佐々木画伯がおとりになったものと
思います。そしてステンドグラスの堂
の詩を拝読して装幀の美しさを更に感
じました。

秋灯下、御作品を拝読して南欧を思
いますことは、たいへんたのしいこと
です。

* 乾直恵

ここに収められたお作品は小生のみ
ならず詩壇の諸氏からすでに好評をか
ちえていたのに、これが一本にまと

められましたのは御同慶にたえませ
ん。故人になられた百田宗治氏がごら
んになったら定めし喜ばれたこと想
います。この出色の一本が必ず本年度
の詩壇の問題詩集となることを信じて
疑いません。

* 近藤 東

シナリオのほうに相当文学精力をと
られながらよく詩をお作りになると感
心しております。

* 天野 隆一

予想にたがわぬ立派な詩集で大へん
嬉しく思いました。ある年間の作品集
である詩集とちがって、一つの記念、
或はテーマのもとに結集された作品集
として、私は親しい友人では竹中郁君
の(象牙海岸) 山村順君の(空中散歩)
多喜さんの(ウラジオ詩集)を贈られ
ましたが、丁度昭和七年に竹中君の渡
欧記念作品集の前記(象牙海岸)に規
を一にする貴著を拝見して大へん興味

深く、竹中君の港々の郷愁が匂ってい
るのに対し、ジェット機で一足飛びの
ろーま、ぱりであり又それに相当する
詩野の展開がみられ、私としては得が
たく貴い本だと感謝しています。かつ
て貴家にて拝見したスライドと想い合
せて再読三読しています。

* 小野 十三郎

『ろーま』は、故溝口健二の良き相
棒であった依田が、一昨年ウエニス
の映画祭に日本代表団の一人として出席
したとき、ゆきの飛行機の中や、ロー
マ滞在中の見聞を十六編の散文詩に仕
立てたもの。この人は、映画ではあ
んな派手な仕事をしながら、詩となる
と、抑えた表現を取る人だが、それが
外遊詩集に生きて、異郷にあってもへ
んに感傷的にならず、極めてドライな
ところがよい。短時日の一旅行者に、
も少し奔放さがほしいというのは無理
だろう。

(大阪朝日)

* 中江 俊夫

御詩集が依田さんの言葉で溢れてい
るということ、現代詩が類型化して
いる時、実に貴重でユニークなお仕事
だと思います。

* 小坂 哲人

京都へ来た観光客の中にみたインド
人の黒い肌と輝く眼、そのインド人の
祖国の主都ニューデリはどんなところ
であろう。「インド人の足」はありあ
りとインド人の黒い肌を、輝く目を、
そしてその奥底に流るる民族のしぶと
い叫びを伝えてくれる。第二次世界大
戦後の二つの世界を代表するソ同盟と
アメリカの眼を、グット引きつけたイ
ンドはどんな国であろう。ネールが叫
び、メノンがアメリカへ飛びソ同盟へ
渡り、昨日はイギリスのイーデンと語
り合っていたかと思うと、今日はエジ
プトでナセルと会談している。世界を
舞台上に華やかな活動の後に、未開のイ
ンド人の黒い肌と輝く眼がじっと見守

っている。裸足のインド人はもうす
で未開ではないのだ。「インド人の足」
はそれをわれわれに語ってくれる。

ジェット旅客機はアラビアの上空を
飛ぶ。ただ地図でしか知らないアラビ
アとペルシア湾、写真でしかみたこと
のない砂漠の白さと海の青さ、それは
如何に動いても区切られ、枠にはめこ
められた砂漠の広さであり、海の広さ
である。「アラビアの砂漠とペルシア
湾の海と」は不気味な骨灰の不吉な白
い砂漠の限らない広さを知らせてくれ
た。その白さを生み育てた長い民族の
戦いの歴史。もはや「アラビアのロー
レンス」の時代はすぎ去ったのだ。
「私は見つけた。ひとところ、海の
流れ込んでいるのを」

アラビアは生きている。骨灰のよう
な白い砂漠は死んではいないのであ
る。われわれもジェット旅客機に乗っ
ているのではなからうか。アラビアの
上空にさしかかり、異様な下界の姿に
驚愕の眼を睨り、しきりと胸がさわぐ。

* 久板栄二郎

これまで外遊された方々の紀行文は
いろいろ読みましたが、詩の形で印
象記ははじめてです。新鮮で、深い印
象を受けました。印度人の足、空から
見たアラビアの砂漠、太陽の国々の野
性の匂いなどの描写、ことに興ぶかく
拝見しました。

* 永瀬 清子

詩壇の詩が自己の内部を切りきざむ
ことのみに傾いていることに、大きな
不満をもっていました私は、御詩集を
よんで快心の万歳をさげました。と
申しますれば、あまり大げさすぎる
とお思いで御さいますようが、私は自分
が仲々思う以上に自分のむかう所へ行
けないのと、詩壇と云うものについて
の軽蔑とで、ここ一年近くもとてもと
ても苦しみを感じていました。そして
私のアジア詩集を、不満ながらにすこ
しづつ書きすすんでいました。これは
どうもまだまだ私の手に合いません

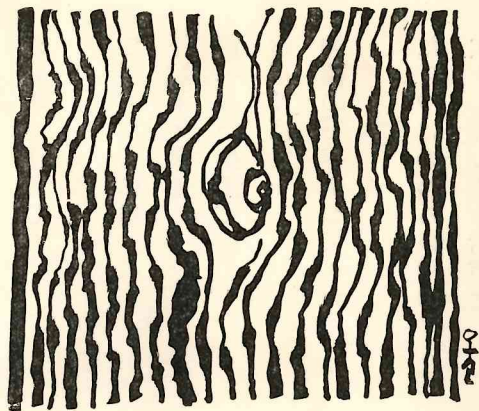
が、書くということの自身をあたえて
くれましたのは『ろーま』の大きなお
かげでした。

* 浜田 知章

「アラビアの砂漠とペルシア湾の海
と」は篇中ぼくの最も好きな作品です。
詩集のあとがき自体が、ぼくには詩
であるのです。特に依田さんの詩観が
出ているように思いました。「荒々し
いほど、たくましい、重厚な、どぎつ
いような、健康な命」とあるのは同感
です。
御専門のシナリオとシナリオの骨格
をなしているエスプリと、こんどの『
ろーま』と。依田さんという詩人の復
雑さと強靱なエネルギーに教えられ
る点大です。

* 野田 宇太郎

久しぶりにたのしい詩集で、拝読し
ながらあのローマの臭いを嗅ぎなが
ら、いつしか空をこんでゆく気持でし
た。著者が読者をこんなにひきつける
本(詩集ばかりでなく)は本当にめづ
らしいことでした。



紙 手

夫 猛 野 佐

苦勞苦痛苦腦

それから……生れた作品

……ひとに見せるためにか

こころの中に

こいつが巣くつてやがる

渠の中のやつをつまみだせ

真実をおかす虫なんだ

炎天にさらせ

陽に浸せ

体をぶつつけろう

……それから生れるもの

これが本ものだ

編集後記

「骨」をながらく休刊していたがこんど、装をあらたに12号を発行した。

休刊はしていたが、毎月必ず例会をもち、大いに議論をたまたかまし、その活動を活潑にすすめていたわけである。Aバクの会▽やA日曜クラブ▽と交流し

て、文化運動にも加わっている。この間は日仏会館の(ピアノと詩の夕)に、同人それぞれの詩を朗読して好評を博した。S Y京映の暮間詩は山前君の演出であるが仲々堂に入っている。

西山君は陶画展を、佐々木君は小品展を、四条の土橋画廊で催した。共にエスプリが躍動している作品であった。依田君は

新日本放送へA成吉思汗▽を26回にわたつてかいた。オリヂナルな構想によつて、成吉思汗をいかに活躍せしめた。深瀬さんは病魔を克服して六月から大学へ出校である。筑摩からA日本の砂漠の中に▽を出刊。梅棹君のA中央公論▽やA総合▽でのエッセイは見事である。

富岡さんは博物館の宮仕へに

忙がしく、荒木君は相かわらず中共貿易ととりくんでいる。山前君は社長と小使を兼務して、その中間で社員たちをうまくひきまわしているのはさすがである。佐野君のユニイクなろうけつ染はまた天下一品である。

休刊中にもかかわらず多数の詩集や雑誌の寄贈をうけた。つしんでお礼を申し上げる。(I)

同人

- 荒木利夫 京都市北区小山東元町二六
- 井上多喜三郎 滋賀県安土町西老蘇
- 梅棹忠夫 京都市左京区北白川伊織町六六
- 佐々木邦彦 京都市東山区山科大塚森町一六の八
- 佐野猛夫 京都市左京区下鴨梅木町一九
- 富岡益五郎 京都市左京区下鴨岸本町二一
- 西山英雄 京都市伏見区深草願成町八
- 深瀬基寛 京都市上京区小松原北町六九の一
- 山前實治 京都市東山区大和大路通五条下ル南梅屋町
- 依田義賢 京都市左京区下鴨泉川町五三

骨 十一号 定 100

昭和三十三年八月十日発行

編集者 山前實治

発行者 依田義賢

発行所 骨發行所

京都市左京区泉川町五三
電話(一)〇七九六依田方

〔骨への通信及詩集雑誌の御寄贈は左記編集所宛に願います
京都市中京区御幸町御池上ル 双林プリント内 山前實治
電話(四)三三八二